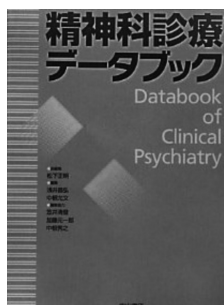


■ 書 評



精神科診療データブック

総編集 松下正明
編集 浅井昌弘, 中根允文
中山書店, 2010年5月
860頁, 定価 15,750円

本書「はしがき」に「精神科医療において不可欠な知識と技術のエッセンスをデータブックとして一書にまとめた」と記載されているように、精神科医療に必要な診察法、検査法、評価法、ガイドライン・アルゴリズムを中心に編纂した書物である。章建ては、1. 診断基準・分類 (140ページ)、2. 精神症状診察・評価法 (57ページ)、3. 心理検査・評価法 (184ページ)、4. 診療ガイドラインとアルゴリズム (58ページ)、5. 抗精神薬一覧 (130ページ)、6. 文献関連事項 (36ページ)、7. 我が国の精神保健福祉 (235ページ) となっており、ページ数からみても、本書のメインは「心理検査・評価法」と「我が国の精神保健福祉」の章にある。

数ある心理検査法をこれだけ集約して解説した書物は他にない。特に認知症関連の項目は充実しており、本書に記載されている内容は認知症の医療サービス従事者にとっては必要にして十分の内容である。

「我が国の精神保健福祉」の章は、もう一つのメインディッシュである。本書に詳しく述べられているが、我が国の精神科診療に関わる法律は、精神衛生法の時代から精神保健法の制定・改正により大きく変化した。最近でも障害者自立支援法 (2005年)、医療観察法 (2005年) の改正・施行があり、社会の要請に応じて次々と新たな枠組みが整えられている。このような精神科医療に関わる法的側面についても、十分な記述がなされている。とりわけ、「医療観察法

とその運用状況について」の項目は、対象者が実際にどのような処遇を受けているかについて実際のデータと共に記述されており、必読の部分である。

かねがね、我が国の精神障害・精神科医療サービスの年間統計が欲しいと思っていた。我が国の精神障害の患者動向、疾病構造の変化、治療法の変化、精神科医療サービスの対応などについてのまとまったデータがなかったからである。本書の「我が国の精神保健福祉」の章には、V. 疫学統計・諸数値表の部分があり、そこには精神病院の状況、社会復帰施設の状況、自殺の現状、児童・思春期の統計、産業保健分野の統計がまとめられている。都道府県別の精神科医療データが掲載されているが、都道府県別の措置率は、大阪市がダントツに高い (716ページ)。都道府県別の平均在院日数のグラフを見ると、平均在院日数が短いのは、高知県、東京都、福井県であり、逆に長いのは鹿児島県、徳島県、茨城県である (721ページ)。精神医療審査会の請求件数は福岡市、大阪市、岡山県、東京都が飛びぬけて多い (722ページ)。このようなデータを眺めながら、その理由を考えたり、その対策を考案してみるのも楽しい本書の利用法である。

本書の特徴の一つは、歴史的な事柄と新しい事項とが記載されており、歴史と将来とが程良くミックスされている点にある。ICD (International Classification of Diseases) の歴史は1850年代にまでさかのぼるとは、本書を読むまで知らなかった。精神障害はICD-6 (1948年) になって初めて独立した章となり、ICD-10 (2003年) の「精神及び行動の障害 (F 00-F 99)」へと充実されていく過程をよく理解することができた。さらに、本書ではDSM-Vへの展望までもが記載されている。それにしても精神医学・精神科医療の間口の広さには、驚嘆するばかりであり、これだけ広範囲のデータを編纂された編集者の力量にただ感嘆する。

(武田雅俊)